

グループワークの検討事項について

No.	検討事項	内容	市における取組の現状	グループワークでのまとめ	対応
1	「希望をかなえるヘルプカード」の利用普及	ヘルプカードとは、自分が望んでいることを、安心してスムーズにできるように自分が使うカード。周りの人に自分が望むことやお願いしたいことなどを書いておき、必要な時にだけ見せて使う。 認知症施策推進大綱「ヘルプカードを自治体に対し周知し、利用を促進する。」や生駒市第9期介護保険事業計画の第4章「認知症の人が尊厳を保持し希望を持って暮らせる社会の実現」中、「認知症の人が自らの意思に基づき、生きがいづくりや地域活動に参加できるよう、希望を叶えるヘルプカードの利用等、環境整備を進めます。」としている。	市としては、「希望を叶えるヘルプカード」を普及させる取組は行ってない。	認知症の当事者など、本人がどう使いたいかニーズを把握することから始めたらどうか。	医療・介護職向けに、希望を叶えるヘルプカードの活用策の周知
2	行方不明者対策についての意見交換会（多職種連携研修）	「行方不明にならずに、安心して外出できる地域づくり」と題し、警察、医療機関、その他関係機関で意見交換や研修を実施する。	・認知症高齢者声掛け訓練～みんなで体験してみよう～を、行方不明による事故を未然に防ぐことを目的として、自治会、包括、市が参加して実施（R4：3自治会、R5：3自治会） ・行方不明高齢者検索ネットワークシステムの運用：行方不明になるリスクがある人が事前に市に登録し、包括と警察で登録情報を共有している。	認知症などで行方不明になる方は増えている。警察により、現状や行方不明時の対応などを教示いただけて、多職種連携研修ができるなら、新しい取組であると思う。行方不明の方の捜索となると、最近は、町民向けのメール・LINEで情報共有しているところもあり、顔を知っている人も多いので、このような取り組みも有効ではないか。	警察向けに「認知症サポーター養成講座」を実施し、行方不明対応時などの困りごとを共有。捜索にあたっての情報共有については、引き続き市で情報収集する
3	グループホームで当事者とのミーティングを開催	グループホームを訪問し、当事者とミーティングを行い、どのようなことを必要としているか等を話し合う機会を設ける。	認知症カフェ（6か所）と当事者ミーティング（2月に1回、R6～は月1回）を実施している。	グループホームの訪問で当事者のお話を聞くことも勉強になるが、認知症カフェを視察したい。R5年度は、「カフェのチラシ」も医療機関や薬局での配布協力もしていくことになっているので、カフェについて知ることはいいのではないか。	市内認知症カフェと調整して視察実施を検討
4	スローレジの導入（スーパー）	高齢者や認知症の方、障害者、妊婦、子連れなど、ゆっくりと安心して支払いがしたい人に向けて作られたレジ。自分のペースで会計ができ、各地で広がりを見せている。スローレジを導入できないかを検討。	生駒市のスーパーでは実施されていない。	例えば、認知症月間等、期間限定でスローレジをやってもらえるよう、店に話をできないか。実施することをHPに掲載したりすることで、共生社会につながる店の取組として紹介することもできる。	本年度中の実施に向けて、市と地域包括支援センターが連携して取り組む
5	当事者とともにつくる「認知症の人にやさしいお店づくり」	認知症当事者が実際にお店での困っていることや、従業員が接客事例から不安なこと等を、お店と当事者、包括、その他関係機関が実際に対話し、当事者目線で、誰もが楽しく買い物ができる環境を目指し連携する。	来年度以降、包括連携協定を締結している近鉄百貨店で認知症サポーター養成講座などを実施していくことを検討中（従業員が講座を受講されたお店は、「認知症にやさしいお店」として登録を促す）	当事者のニーズを把握することから始めたらどうか。	本年度中の実施に向けて、市と地域包括支援センターが連携して取り組む
6	医療機関向けの認知症サポーター養成講座の実施	医療機関向けの認知症サポーター養成講座を実施し、医療介護連携を強化する。	令和5年度は、生駒市立病院で実施した（57名受講）	・クリニックで講座を実施してみる。（事務方のほうが、認知症など様子の変化に気づくことがある） ・医療機関従事者は認知症の方への対応を知らないことが多いと感じる。 ・講座案内の際に義務感を負わないような周知の仕方。「認知症対応力向上セミナー」など ・「認知症サポーター養成講座」のハードル高い。名称が「養成講座」なので「何かやらなければならないのではないか」と思ってしまう。ネーミングがネック。〇〇研修（認知症サポーター養成講座）というように書くとか。 ・学生なら「何かできるようになった感」があるが、大人だと「やらなければならない感」がでてしまう	認知症対策部会部会員のクリニックで講座を実施予定
7	小中学生向けの認知症サポーター養成講座へ参加	地域包括支援センターを中心に実施している認知症サポーター養成講座の現場に参加するとともに、専門職の立場から話をする機会を持つ。	小中学生向け認知症サポーター養成講座を4校実施した	・生駒は高齢者と同居している家族が少ないような気がする ・小中学校への働きかけのときも「認知症サポーター養成講座」の名称だと、意識が高い学校は受けてくれるが、そうでない学校は敬遠するかもしれない。 ・実施へのハードルがカリキュラム上高かったが、教育長が小5のカリキュラムで実施するように働きかけるといった話もあったため今後ハードルが下がるかもしれない。	地域包括支援センターが中心となって、小中学校向けの認知症サポーター養成講座の実施を積極的に進める
8	高校生対象の部会員による出前講座の実施	各部会員が、テーマを決めて、ミニ講座を実施。医療介護分野に興味を持ってもらえるきっかけとする。	認知症サポーター養成講座を実施している	・「地域で暮らす人のために将来自分ができること」を考える機会 ・介護人材確保事業の一環として実施。リハビリ等を職業体験に絡ませるなど。 ・フォーラムになると年齢があがる、「自分が認知症になったらどうしよう」の年代がくる。学生は認知症をわがごとしとらえることはできない。「仕事としておもしろそう」「何か支援できそう」という切り口でいったほうがいい	市で実施する介護人材確保事業の中での検討事項とする
9	認知症に関する冊子（医療編・生活編・リハ編）	高齢化に伴って、近年認知症への関心が高まっている。認知症について市民の皆さんが知りたいことを、医療やリハビリ、薬など各分野でまとめた冊子（チラシ）を作成する。	広く市民の皆様気軽に手に取ってもらい、認知症についての正しい知識を得てもらう目的で「認知症の基礎知識」を作成、配布している。	・巷にあふれている情報はすでにみんな知っている。生駒市で暮らしていくための情報（事例など）が載っていると良い。「生駒では認知症になっても住み続けられるんだな」と思えるようなもの。 ・認知症に関するパンフレットはたくさんある。「このまま生駒で暮らし続けるには」という方向性で冊子を作成。認知症カフェや本人ミーティング、相談先など。「生駒なら認知症になっても大丈夫。暮らしていけるな。」と思える冊子。	次年度以降の検討事項とする
10	「認知症になったらまず読む冊子」の作成	「もしかして?」「あれ?」と思ったときに手に取る一冊。違和感に対処し、前向きに、自分らしく生きるヒントを見つけられるような冊子を作成する。	「認知症ケアパス」を作成している。	・診断があってからどう自分の生活を支えてもらえるのか、取り巻く地域の支援は何かあり、どのように助けてもらいながら地域で生活できるのか。社会として市として支援が整ってきているよ、という部分を見せる。	次年度以降の検討事項とする